

10/052, 315

XP-002212401

AN - 1987-034004 [05]

AP - JP19850133702 19850619

CPY - SHIS

DC - D21

FS - CPI

IC - A61K7/00

MC - D08-B09A

PA - (SHIS) SHISEIDO CO LTD

PN - JP61291515 A 19861222 DW198705 007pp

PR - JP19850133702 19850619

XA - C1987-014545

XIC - A61K-007/00

AB - J61291515 Material is prepd. by blending one or more of vegetable extracts from Alpinia (Alpinia japonica Mig., etc.), Amomum (Amomum cardamomum L., etc.), Hedychium (Hedychium spicatum, etc.), (Elettaria cardamomum, etc.), Curcuma (Curcuma aromatica Salisb, etc.), and Kaempferia (Kaempferia galanga, etc.).

- USE/ADVANTAGE - For the prevention of hot feeling after sunburn, rough skin, razor rash, inflammations, etc.(0/0)

IW - COSMETIC MATERIAL CONTAIN ONE VEGETABLE EXTRACT PREVENT HOT FEEL AFTER SUNBURN ROUGH SKIN

IKW - COSMETIC MATERIAL CONTAIN ONE VEGETABLE EXTRACT PREVENT HOT FEEL AFTER SUNBURN ROUGH SKIN

NC - 001

OPD - 1985-06-19

ORD - 1986-12-22

PAW - (SHIS) SHISEIDO CO LTD

TI - Cosmetic material contg. at least one vegetable extract(s) - used to prevent hot feeling after sunburn, rough skin, etc.

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A)

昭61-291515

⑬ Int.Cl.⁴

A 61 K 7/00
7/40

識別記号

庁内整理番号

7306-4C
7133-4C

⑭ 公開 昭和61年(1986)12月22日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全7頁)

⑮ 発明の名称 化粧品

⑯ 特 願 昭60-133702

⑰ 出 願 昭60(1985)6月19日

⑱ 発 明 者 駒 崎 久 幸 横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内
⑲ 発 明 者 平 尾 哲 二 横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内
⑳ 出 願 人 株式会社資生堂 東京都中央区銀座7丁目5番5号

明細書

1. 発明の名称

化粧品

2. 特許請求の範囲

ハナミョウガ (*Alpinia*) 属、シュクシャ (*Amomum*) 属、サンナ (*Hedychium*) 属、ショウズク (*Elettaria*) 属、ウコン (*Curcuma*) 属、バンウコン (*Kaempferia*) 属から選ばれる植物の抽出物を一種または二種以上配合することを特徴とする化粧品

3. 発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本発明は日焼け後のほてり、肌荒れ、カミソリまけ、炎症等を防止する効果に優れた化粧品に関する。

〔従来の技術〕

従来から生薬抽出物が種々の薬効を有する事が知られているが、本発明者らは、ハナミョウガ

属、シュクシャ属、サンナ属、ショウズク属、ウコン属及びバンウコン属等の植物抽出物からなる群から選ばれる1種または2種以上の植物抽出物が外用により、優れた日焼け後のほてり、肌荒れ、カミソリまけ、炎症等を防止する従来知られていない効果を見出した。

〔発明が解決しようとする問題点〕

本発明者らは、外用により、優れた日焼け後のほてり、肌荒れ、カミソリまけ、炎症等を防止する効果を有す生薬を見いだそうとして鋭意研究を重ねた結果、驚くべきことにハナミョウガ属、シュクシャ属、サンナ属、ショウズク属、ウコン属及びバンウコン属等の植物抽出物からなる群から選ばれる1種または2種以上の植物抽出物を配合した化粧品は、日焼け後のほてり、肌荒れ、カミソリまけ、炎症等を防止する効果に優れていることを見だし、本発明を完成するに至った。

〔問題点を解決するための手段〕

すなわち、本発明はハナミョウガ (*Alpinia*) 属、シュクシャ (*Amomum*) 属、サン

ナ (*Hedychium*) 属、ショウズク (*Elettaria*) 属、ウコン (*Curcuma*) 属、バンウコン (*Kaempferia*) 属等の植物抽出物からなる群から選ばれる1種または2種以上の植物抽出物を配合する事を特徴とする化粧品に関する。

本発明のハナミョウガ属植物としてはハナミョウガ (*Alpinia japonica* Miq.), シナアオノクマタケラン (*Alpinia chinensis* Rosc.), アオノクマタケラン (*Alpinia intermedia* Rosc.) タイワンハナミョウガ (*Alpinia nutans* Rosc.), ナンキョウソウ (*Alpinia galanga* Willd.), リョウキョウ (*Alpinia officinarum* Hance), ソウズク (*Alpinia globosa* Horan), ヤクチ (*Alpinia oxyphylla* Miquel), コウリョウキョウ (*Alpinia galanga* Willd.), サンキョウ (*Alpinia officinarum*, Hance, form.) 等がある。シュクシャ属植物としてはビヤクズク (*Aromum cardamomum* L.), ソウカ (*Aromum tsao-ko* Creust), シュクシャ (*Aromum xanthioides* Wall.), ヤクチ (*Aromum amarus*) 等があ

ベンタン、スクワラン等の非極性溶媒と共に加熱還流して得られる。その際、極性溶媒で抽出した後濃縮し、それを中極性または非極性溶媒にて抽出し、その濃縮物を用いるのが好ましい。

本発明におけるシュクシャ属、サンナ属、ショウズク属、ウコン属、バンウコン属、ハナミョウガ属等の植物抽出物からなる群から選ばれる1種または2種以上の植物抽出物の配合量は、化粧品全量中、乾燥物として0.001-10重量%、好ましくは0.005-5重量%である。0.001重量%以下であると、本発明でいう効果が十分に発揮されず、好ましくない。

本発明の化粧料は前記の必須成分に加えて必要に応じて、本発明の効果を損なわない範囲内で、化粧品、医薬品等に一般に用いられる各種成分、すなわち水性成分、粉末成分、油分、界面活性剤、保湿剤、増粘剤、防腐剤、酸化防止剤、香料、色剤、薬剤等を配合することができる。また本発明の化粧料の剤型は任意であり、例えば化粧水等の可溶化系、乳液、クリーム等の乳化系ある

る。ウコン属植物としてはキョオウ (*Curcuma aromatica* Salisb), ガジュツ (*Curcuma zedoaria*) 等がある。ショウズク属にはショウズク (*Elettaria cardamomum*), サンナ属にはサンナ (*Hedycium spicatum*), バンウコン属にはバンウコン (*Kaempferia galanga*) 等があり、抽出物はこれらより以下の方法で得られる。

ハナミョウガ、タイワンハナミョウガ、アオノクマタケラン、ナンキョウソウ、ヤクチ等の種子、ナンキョウソウ、コウリョウキョウ、リョウキョウ、キョオウ、ガジュツ、サンナ、バンウコン等の根茎、ソウズク、ビヤクズク、ソウカ、シュクシャ、ショウズク、およびヤクチ等の果実を有機溶媒、例えばメタノールやエタノールのような低級アルコールまたは含水低級アルコールの抽出物でもよいし、メタノールやエタノールのような低級アルコールまたは含水低級アルコール、アセトン、1, 3-ブチレングリコール、プロピレングリコール等の極性溶媒クロロホルム、酢酸エチルエステル、エーテル等の中極性溶媒ヘキサン、

いはファンデーション、分散液、などの剤型をとることができる。

尚、外皮適用による効果は、紫外線紅斑抑制率と実使用テストによる皮膚に対する、ほてり、肌荒れ、あるいは、カミソリ負け等に対する解消率の2点から判定した。

次にハナミョウガ属植物抽出物の効果について述べる。抗炎症作用のケミカルメディエーターは現在なお不明な点が多く、従つて、薬物の外皮適用による抗炎症作用を測定する試験としては紫外線紅斑法が適している。すなわち、ハートレイ型アルビノモルモットの背部皮膚を刈毛・剃毛し、正中線を対称に背部皮膚にゴム板を用いて1.41×1.41cmの区画を設け、中波長紫外線 ($\lambda_{\max}=305\text{nm}$) を2.0J/cm² 照射して紅斑を作成した。紫外線照射後片側の区画に薬物を塗布し添加、経時的に紅斑の形成を判定した。薬物の塗布部位の紅斑 (E_1) と無塗布対照部位の紅斑 (E_0) を求め、次式によつて紫外線紅斑抑制率を算出し、薬物の抗炎症活性とした。薬物は乾燥残分をエタ

ノールに溶かし試料とした。

$$\text{紫外線紅斑抑制率} = \frac{E_0 - E_1}{E_0} \times 100(\%)$$

薬物塗布後3時間後の測定値を例として表-1に示す。

判定方法を以下に示す。

(判定)

○	: 紫外線紅斑抑制率	65%以上
○	: " "	40-65%
△	: " "	20-40%
×	: " "	20%以下

(以下余白)

度、表-2に示される基本処方ベースに0.5%の試料を配合したローションを塗りカミソリまけに対する効果を調べた。

(試料)

表-2に示される基本処方ベースに0.5%の試料(表-3)を配合処方したローション。

表-2 基本処方ベース

1) グリセリン	4.0%
2) 1,3-ブチレングリコール	4.0%
3) エタノール	7.0%
4) 抽出物	0.5%
5) ポリオキシエチレンオレイル アルコール(20モル)	0.5%
6) 精製水	残余

表-1 紫外線紅斑抑制率

薬物	適用量(μg/cm)	抑制率
コウリョウキョウ	25	○
リョウキョウ	25	○
ヤクチ	25	○
サンナ	25	○
ガジュツ	25	○

コウリョウキョウ抽出物、ガジュツ抽出物およびリョウキョウ抽出物に非常に強い紫外線紅斑抑制作用を認めた。

実使用テストによる、日焼け後のほてり、肌荒れ、およびカミソリまけ

(試験方法)

日焼け後のほてり、肌荒れ等に悩む、健康な女性の被試験者、1群20名として計10群で実施し、表-2に示される基本処方ベースに0.5%の試料を配合したローションを顔面に塗布し、ほてり、及び1週間後の肌荒れを判定し総合評価した。また、健康な男性の被試験者、1群20名として計10群で実施し、ひげそり後に、その都

表-3

処方表-2中の抽出物名	試験例
コウリョウキョウ	1
リョウキョウ	2
サンナ	3
ヤクチ	4
ガジュツ	5

(日焼け後のほてり、肌荒れの判定基準)

著効: 日焼け後のほてり、および1週間後の肌荒れがほとんど目立たなくなった。

有効: 日焼け後のほてり、および1週間後の肌荒れが非常に弱くなった。

やや有効: 日焼け後のほてり、および1週間後の肌荒れがやや弱くなった。

無効: 日焼け後のほてり、および1週間後の肌荒れは変化なし。

(カミソリまけの判定基準)

著効：剃毛後のカミソリまけが著しく改善された。

有効：剃毛後のカミソリまけが非常に改善された。

やや有効：剃毛後のカミソリまけがやや改善された。

無効：剃毛後のカミソリまけは変化なし。

表-4

効果	比較例 1	試験例 1	試験例 2
日焼後のほてり 改善効果	×	○	○
日焼後の肌荒れ 改善効果	×	○	○
カミソリまけ 改善効果	×	○	○

表-5

効果	試験例 3	試験例 4	試験例 5
日焼後のほてり 改善効果	○	○	○
日焼後の肌荒れ 改善効果	○	○	○
カミソリまけ 改善効果	○	○	○

(判定)

○：被試験者の著効、有効の示す割合
(有効率)が80%以上の場合

○： " " "
(有効率)が50-80%以上の場合

×

" " "
(有効率)が50%以下の場合

表-4の比較例-1は試験例-1の処方と同一で
コウリョウキョウ抽出物を除いた処方を使用し
た。

次に実施例によって本発明をさらに詳細に説明
する。尚、本発明はこれにより限定されるもの
ではない。配合量は重量%である。

(製法)

精製水にクエン酸、クエン酸ソーダ、グリセリン、
1,3-ブチレングリコール、を溶解する。別に
エタノールにポリオキシエチレンオレイルアル
コール、香料、メチルパラベンおよびコウリョウ
キョウ抽出物を溶解し、これを前述の精製水溶液
に加えて可溶化し、ろ過して化粧水を得た。

実施例 1 化粧水

(1)コウリョウキョウ抽出物	0.15
(2)グリセリン	4.0
(3)1,3-ブチレングリコール	4.0
(4)エタノール	7.0
(5)ポリオキシエチレン オレイルアルコール	0.5
(6)メチルパラベン	0.05
(7)クエン酸	0.01
(8)クエン酸ソーダ	0.1
(9)香料	0.05
(10)精製水	残余

実施例 2 化粧水

(1)サンナ抽出物	0.15
(2)グリセリン	4.0
(3)1,3-ブチレングリコール	4.0
(4)エタノール	7.0
(5)ポリオキシエチレン オレイルアルコール	0.5
(6)メチルパラベン	0.05
(7)クエン酸	0.01
(8)クエン酸ソーダ	0.1
(9)香料	0.05

(10) 精製水 残余
(製法)

精製水にクエン酸、クエン酸ソーダ、グリセリン、1,3-ブチレングリコール、を溶解する。別にエタノールにポリオキシエチレンオレイルアルコール、香料、メチルパラベンおよびサンナ抽出物を溶解し、これを前述の精製水溶液に加えて可溶化し、ろ過して化粧水を得た。

実施例 3 化粧水

(1) サンナ抽出物	0.15
(2) グリセリン	4.0
(3) 1,3-ブチレングリコール	4.0
(4) エタノール	7.0
(5) ポリオキシエチレン オレイルアルコール	0.5
(6) ビサボロール	0.1
(7) コウリョウキョウ抽出物	0.15
(8) マロニエ抽出物	0.1
(9) ビワ抽出物	0.1

(4) 還元ラノリン	5.0
(5) エチルパラベン	0.3
(6) ポリオキシエチレン(20)ソルビ タンモノバルミチン酸エステル	2.0
(7) ステアリン酸モノグリセリド	2.0
(8) リョウキョウ抽出物	1.0
(9) 香料	0.03
(10) 1,3-ブチレングリコール	5.0
(11) グリセリン	5.0
(12) 精製水	残余

(製法)

(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)と(9)を加熱溶解し75℃に保ったものを、75℃に加温した(10)(11)と(12)に攪拌しながら加える。ホモミキサー処理し乳化粒子を細かくした後、攪拌しながら急冷し、クリームを得た。

実施例 5 クリーム

(1) セトステアリルアルコール	3.5
(2) スクワラン	40.0

(10) メチルパラベン	0.05
(11) クエン酸	0.01
(12) クエン酸ソーダ	0.1
(13) 香料	0.05
(14) 精製水	残余

(製法)

精製水にマロニエ抽出物、ビワ抽出物、クエン酸、クエン酸ソーダ、グリセリン、1,3-ブチレングリコール、を溶解する。別にエタノールにポリオキシエチレンオレイルアルコール、ビスボロール、コウリョウキョウ抽出物、香料、メチルパラベンおよびサンナ抽出物を溶解し、これを前述の精製水溶液に加えて可溶化し、ろ過して化粧水を得た。

実施例 4 クリーム

(1) セトステアリルアルコール	3.5
(2) スクワラン	40.0
(3) ミツロウ	3.0

(3) ミツロウ	3.0
(4) 還元ラノリン	5.0
(5) エチルパラベン	0.3
(6) ポリオキシエチレン(20)ソルビ タンモノバルミチン酸エステル	2.0
(7) ステアリン酸モノグリセリド	2.0
(8) ガジュツ抽出物	1.0
(9) 香料	0.03
(10) 1,3-ブチレングリコール	5.0
(11) グリセリン	5.0
(12) 精製水	残余

(製法)

(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)と(9)を加熱溶解し75℃に保ったものを、75℃に加温した(10)(11)と(12)に攪拌しながら加える。ホモミキサー処理し乳化粒子を細かくした後、攪拌しながら急冷し、クリームを得た。

実施例 6 クリーム

(1) セトステアリルアルコール	3.5
------------------	-----

(2) スクワラン	40.0
(3) ミツロウ	3.0
(4) 還元ラノリン	5.0
(5) エチルパラベン	0.3
(6) ポリオキシエチレン(20)ソルビ タンモノバルミチン酸エステル	2.0
(7) ステアリン酸モノグリセリド	2.0
(8) ヤクチ抽出物	1.0
(9) 香料	0.03
(10) 1,3-ブチレングリコール	5.0
(11) グリセリン	5.0
(12) 精製水	残余
(製法)	
(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)と(9)を加熱溶解し7 5℃に保ったものを、75℃に加温した(10)(11)と(1 2)に攪拌しながら加える。ホモミキサー処理し乳 化粒子を細かくした後、攪拌しながら急冷し、ク リームを得た。	

(以下余白)

く他の成分を混合し、加熱溶解して70℃に保つ
(油相)。水相に油相を加え予備乳化を行い、ホモ
ミキサーで均一に乳化する。これを攪拌しながら
アルコール相とクインスード抽出物を加える。
その後攪拌しながら30℃に冷却して乳液を得た。

実施例 8 乳 液

(1) ガジュツ抽出物	3.0
(2) ステアリン酸	1.5
(3) セチルアルコール	0.5
(4) ミツロウ	2.0
(5) ポリオキシエチレン(10) モノオレイン酸エステル	1.0
(6) グリセリンモノステアリン 酸エステル	1.0
(7) クインスード抽出物(5%水溶液)	20.0
(8) ヒアルロン酸ナトリウム	0.1
(9) プロピレングリコール	5.0
(10) エタノール	3.0
(11) ヘチマ抽出物	0.1

実施例 7 乳 液

(1) ハナミョウガ抽出物	3.0
(2) ステアリン酸	1.5
(3) セチルアルコール	0.5
(4) ミツロウ	2.0
(5) ポリオキシエチレン(10) モノオレイン酸エステル	1.0
(6) グリセリンモノステアリン 酸エステル	1.0
(7) クインスード抽出物(5%水溶液)	20.0
(8) プロピレングリコール	5.0
(9) エタノール	3.0
(10) エチルパラベン	0.3
(11) 香料	0.03
(12) 精製水	残余
(製法)	

エタノールに香料およびハナミョウガ抽出物を
加えて溶解する(アルコール相)。

精製水にプロピレングリコールを加え加熱溶解し
て70℃に保つ(水相)。クインスード抽出物を除

(12) リリー抽出物	0.1
(13) シラカバ抽出物	0.1
(14) エチルパラベン	0.3
(15) 香料	0.03
(16) 精製水	残余
(製法)	

エタノールに香料およびガジュツ抽出物を加え
て溶解する(アルコール相)。

精製水にプロピレングリコールを加え加熱溶解し
て70℃に保つ(水相)。クインスード抽出物を除
く他の成分を混合し、加熱溶解して70℃に保つ
(油相)。水相に油相を加え予備乳化を行い、ホモ
ミキサーで均一に乳化する。これを攪拌しながら
アルコール相とクインスード抽出物を加える。
その後攪拌しながら30℃に冷却して乳液を得た。

実施例 9 バ ッ ク

(1) ヤクチ抽出物	0.5
(2) ポリビニルアルコール	15.0

特開昭61-291515 (7)

(3) ポリエチレングリコール	3.0
(4) プロピレングリコール	7.0
(5) エタノール	10.0
(6) メチルパラベン	0.05
(7) 香料	0.05
(8) 精製水	残余

(5) ソルビタンセスキオレイン酸エステル	2.0
(6) トリエタノールアミン	1.0
(7) コウリョウキョウ抽出物	0.1
(8) 顔料	適量
(8) 香料	適量

(製法)

精製水にポリエチレングリコール、プロピレングリコール、メチルパラベン、を加え攪拌溶解する。つぎにポリビニルアルコールを加え加熱攪拌し、香料を溶解したエタノール及びヤクチ抽出物を加え攪拌溶解してバックを得た。

(製法)

タルク、顔料をニーダーでよくかきまぜる。
(粉末部) トリエタノールアミンを50%相当量の精製水に加え70°Cに保つ(水相)。香料を除く他の成分を混合し、加熱溶解して70°Cに保つ(油相)。水相に油相を加えホモミキサーで均一に乳化し、これを粉末部に加えニーダーで練り合わせたあと水分を蒸発させ粉碎機で処理する。さらにこれをよくかきまぜながら香料を均一に噴霧し圧縮成形する。

実施例 10 固形白粉

(1) タルク	85.4
(2) ステアリン酸	1.5
(3) ラノリン	5.0
(4) スクワラン	5.0

実施例1～10より得られた化粧料は、実使用により、ほてり、肌荒れ、あるいはカミソリ負けに対する効果に優れていた。

手続補正書 (自発)

昭和60年7月23日

特許庁長官、宇賀道郎殿



1. 事件の表示

昭和60年特許願第133702号

2. 発明の名称

化粧料

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 東京都中央区銀座五丁目5番5号

名称 (195) 株式会社 生堂

代表者 大土野 良雄



4. 補正の対象

明細書の「発明の詳細な説明」の欄

5. 補正の内容

(1) 明細書第6頁第13～14行目「1.41 1.41cm」とあるを、「1.41×1.41cm」と補正します。

(2) 明細書第6頁第14行目「 $\lambda_{\max} = 305$ 」とあるを、「 $\lambda_{\max} = 305$ 」と補正します。

(3) 明細書第6頁第15行目「2.0J/cm」とあるを、「2.0J/cm」と補正します。

(4) 明細書第7頁第2～4行目

「 $E_o - E_i$

紫外線紅斑抑制率 = 100 (%)

」

とあるを、

「 $E_o - E_i$

紫外線紅斑抑制率 = 100 (%)

」

と補正します。

(5) 明細書第8頁の表-1中「 $\mu g/cm$ 」とあるを、「 $\mu g/cm^2$ 」と補正します。

以上